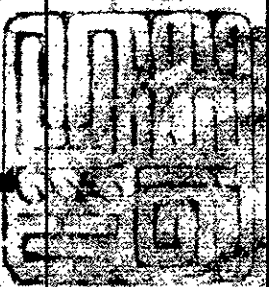


林遠  
著  
勸農新書  
一二

T1A1  
61  
H 48

福岡縣林遠里著



# 勸農新書

版權免許  
不許翻刻

躬耕會藏版

序

我邦。古稱瑞穗國。穀類之美。超越萬國。但農業之書甚少。大率從地方習慣而耕種而已。維新以來。術藝盛起。農家者流輩出。於是著書初布世矣。本縣林遠里。亦用心于農業。考究有年。遂發明五穀生育方法。頃筆記稻種一事。以示余。余受而讀之。其所論。在全穀性。無他奇術。而獲利之多。實

有可驚者。因謂此方法。若能相傳習。自本縣及隣縣。以通行於海內。則必贊昭代豐富之業。而不負瑞穗國之名也。爲命之曰勸農新書。從思先刊行之。其餘諸穀生育法。又將待稿成而續刻焉。乃書其由于卷端。

明治十年第十一月 白井澄夫撰

勸農新書卷一

福岡縣 林遠里 著

稻種生育法上

○ 總論

夫草木の性、其種子各異なりと雖、春芽  
ざし、夏茂り、秋稔るものハ、かならば冬  
より蒔付くべき理にして、寒氣の間、人  
家の内、圍ひ置くべきにあらざ、四季

と兼せよて、雪霜<sup>スノヒ</sup><sup>フキ</sup>厭<sup>いと</sup>ふ草ハ、少<sup>すく</sup>きく、之  
と相違<sup>ちがひ</sup>あれども、稻ハ、元來四季<sup>しき</sup>兼<sup>あ</sup>た  
る草に<sup>あ</sup>て、冬<sup>ふゆ</sup>より蒔<sup>ま</sup>付け、春<sup>はる</sup>置きがたき  
物なれば、止<sup>とど</sup>め得<sup>え</sup>ば、水に浸<sup>ひ</sup>し、又ハ土中  
に圍<sup>かこ</sup>ひ、寒中<sup>かんちゆう</sup>の氣候<sup>きこう</sup>を<sup>わ</sup>忘れ<sup>わ</sup>しめ<sup>し</sup>後<sup>のち</sup>、蒔<sup>ま</sup>  
付け<sup>つけ</sup>べき<sup>べき</sup>なり、從<sup>じゆ</sup>來<sup>らい</sup>種<sup>たね</sup>を浸<sup>ひ</sup>す事<sup>こと</sup>、春暖<sup>春暖</sup>よ  
至<sup>いた</sup>りて、纔<sup>さう</sup>二日<sup>にじつ</sup>數<sup>かず</sup>三十日<sup>さんじつ</sup>を待<sup>まち</sup>て、蒔<sup>ま</sup>  
付け<sup>つけ</sup>所<sup>ところ</sup>に依<sup>よ</sup>りてハ、藁<sup>わら</sup>或<sup>ある</sup>ハ、莖<sup>かき</sup>等<sup>らう</sup>を以<sup>もつ</sup>

て覆<sup>おほ</sup>ひ温<sup>ぬ</sup>め杯<sup>は</sup>し、強<sup>あ</sup>て甲<sup>か</sup>芽<sup>が</sup>を發<sup>は</sup>するも  
のハ、生<sup>な</sup>ひ出<sup>い</sup>れども、性<sup>せい</sup>弱<sup>じやく</sup>くして、稔<sup>あ</sup>り少<sup>すく</sup>  
き、少<sup>すく</sup>しの旱<sup>いん</sup>寒<sup>かん</sup>落<sup>らく</sup>よも、痛<sup>いた</sup>み易<sup>やす</sup>し、是<sup>こ</sup>  
なハち天<sup>てん</sup>理<sup>り</sup>を逆<sup>さか</sup>ひて、四<sup>し</sup>時<sup>じ</sup>の氣候<sup>きこう</sup>を<sup>わ</sup>  
ら<sup>ら</sup>しめざる<sup>に</sup>よ<sup>れ</sup>り、故<sup>ゆゑ</sup>に寒中<sup>かんちゆう</sup>より、種<sup>たね</sup>  
を浸<sup>ひ</sup>し、蒔<sup>ま</sup>付け植<sup>う</sup>付け共<sup>とも</sup>、節<sup>ふし</sup>を後<sup>のち</sup>れざる<sup>に</sup>  
やうに、心<sup>こころ</sup>を用<sup>もち</sup>ふべし、此<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>くすれば  
自然<sup>しぜん</sup>に任<sup>まか</sup>し、生<sup>な</sup>ひ出<sup>い</sup>て、性<sup>せい</sup>強<sup>きやう</sup>く、稔<sup>あ</sup>り多<sup>おほ</sup>き

ハいふよ及ばど、其益多きあり、千年來  
農事よ心を盡し、聊發明ある所ありて、  
種を寒中より、水よ浸し置くの方法を  
得り、依て追々衆人よ諭して、實地よ  
施し行ふ人既よ當國よ半バせり、然る  
よ、此方法ハ、池水河水桶浸等、種よ異か  
る有て、其方法を了得せどして、行ふ人  
ハ、苗を仕立るよ至りて、問う誤りなき

よしもあらば、又土地よ依りてハ、種を  
浸すよ、水少あく、或ハ寒國よして、種を  
水よ浸し置き難き所もあらん事以恐  
れ、日夜心を苦しめ、更よ寒中より、土中  
に圍ひ置くの方法を發明し、屢施行せ  
しに、苗立ち稔りとも、最もよるし、是  
全く浸すにあらば、浸さざるにあらば、  
自然の土濕を受るが故種に障りなき

ものなり、今衆人の行ひ易からんが爲に、其方法を、下に分ち記す、風土に依りて、相應せざると、相應せざると、有べけれど、見ん人試みて後、其宜しきを取べし

○種を寒中より水に浸し置く事

一種を取るにハ、稔て、直に刈取るべし、時經し種ハ、却てよるしからば、草木共に此類多し

一種を取るよハ、出来薄くして、穂の揃ひたる所を撰び、刈取るべし、出来薄き所は、限り、實入よき種多し、豊年ハ猶更の事なり

一種を取るよハ、刈入れし稻を、逆さまに持ち、穂先を突落して、取るべし、實入よき種ほど、落易くして、撰穂するよも、増りてよるし、稻は依り、突落せ

ども落難きハ、穂先をとぎて、取るべ  
但し稻壹把つかの扱つかを、三ツよして、一  
ツと突落さバ、又他の把つかを突落し  
て、取るべし  
一毛け稻いねの種こめを取とるよハ、筵い杯はよ入れ、手  
よて、毛けを揉も去きて、取とるべし、ぶり木等きを  
以もつ、毛けを打う去きりし種こめハ、痛いたく有あるよ

るしからん、  
一秋あきの田いよ、刈かり干ほたる稻いねの、雨あめよ濡ぬしハ  
種こめよ用もちふべからん、多く苗こめ立たあし、  
是こゝハ一ひとたひ芽こめを生はせんとして、又乾かわ  
きし故ゆゑ、二ふたたひ芽こめを生はざるの勢いきほひう  
すけれバかり、  
一ひと種こめを取とるよハ、苗こめ次つぎ壹ひと本ほん宛あて植う植う渡わし置お  
きて、増ま殖えする莖くよ、稔なりりし種こめを取とる

を、宜しとすれども、手数多く、行えれ  
がたし、  
一種を圍ふよハ、日陰に乾して、圍ひ置  
くべし、され共、一通り、日よ當て、暖  
を、能うさまして、後、圍ひ置けハ障  
一種を水よ浸し置くよハ、寒國ハ、雪降  
そむるを、目途とし、暖國ハ、小寒中を

目途とし、寒暖適度の國ハ、冬至迄、目  
途とし、種粒壹斗より、壹斗五升まで  
次、一包と成し、種に泥のたまぬやう  
よ、心次用ひ、浸し置くべし、水ハ池水  
河水に限らば、清淨にたて深き所よ  
るしとするあり、  
但し餘り多分の種次、一包とたて、  
浸し置けハ、包の真中に在し種ハ、



芽ぞ遅く、上邊に在り種ハ、芽ぞ  
し早く不同有てあし、

一流水よ、浸し置くハ、最もよるゝ水替  
るが故、種の氣自づから滯らざりて、  
季節に至り、芽ぞ速かり、

但し種袋包も浸す時、上らげ袋  
和かにして、種の窮屈あらざるや  
うにすべし

一溜水よ、浸し置くハ、分けて水深き  
場所をよろしとす、水深くして、泥ふ  
かき所よ、浸し置き、種よ泥みて、  
あし、水深くとも、泥かき場所ハ、水  
底の砂よ、埋置くべし、

但し水底の砂よ、埋め置きし種ハ、  
春暖の時よ至り、掘出して、仕掛水  
杯よ、浸し替ふべし、

一 桶かめを浸し置くには、種を包まひして  
浸し、少しハ、日も照あ込み、雨も漏こ入る  
やうな、藁杯のあらし蓋かたを覆おひ、春暖  
にありて、折おりて水を入れ替へ、蒔付け  
よと、十日許まり前に至りても、芽を生  
ぼる形かたちをかき時ハ、蓋を取去り、水を減へ  
して、芽の生なぶるを待べし、  
一 陶瓶たうびんの類たぐひを浸し、人家の土間どまに置き

て、板蓋杯いたがせを覆おひ置けバ、空氣くわいの通とひ  
あふくたて、芽こぎを遅く、蒔付け後、  
腐敗くさ滋生はぶるも多し、故ゆゑにかならぬ  
人家の外ぐわいに出し、板蓋いたがせを用ひ、前章  
桶浸かめの通りにして、空氣くわいの通とひ易  
きやうにすべし、  
一 鉄氣てつ水すいハ、種こを浸すに、障さりなきと雖なも  
鉄氣てつに依よるハ、種この痛いたまざるにも

あらび、試みてみるべし、石炭の氣盛  
かる場所杯ハ、かからび種浸すべ  
からび、

一種浸す時、大豆入れ、俵用ふ  
べからび、苗立あま、又扱入れ  
俵に、大豆入れ置くもあま、と、老  
農の物語かり、

一種浸し置く場所ハ、少志ハ、日の照

込む方よろし、従前の浸し方と違ひ、

寒中より、浸し置き、種ハ、長く冷籠

り、故、季節に至り、却て身ざし遅

きが故かり、寒氣の間ハ、木蔭の冷水

よ、浸し置くととも、支かした、春暖よ

向ひて、陽氣を受け易きやうよ、心を

用ふべきかり、

一種を浸すよ、よろしき場所あくして、

止を得ず、木蔭の冷水よ、浸し置き  
種ハ、時付るより、十日許り前よ至り  
て、種包を、水より引揚げ、日陰よ置き  
て、芽の生るを待べし、寒水よ長く冷  
籠りする種ハ、日よ干し、速かに芽  
生ぜしめんとすれば、種の熱ると  
あり、心すべし、  
但し自ら芽生ざるハよ、藁

或ハ、庭杯を覆ひ、温まりを掛け、強  
て芽を生ぜしむるハ、あしよ、  
一寒國よして、且大寒の時よ至れば、水  
底までも、氷とふる、種を浸し置き難  
き場所も有るべし、斯の如き場所ハ、  
下巻土圍ひの法を用ふべし、  
一暖國ハ、種浸むよ、日當適度よ過ぎ、  
春暖に至りて、水の薄が如き場所も

有べし、斯の如き場所に、浸し置くに  
ハ、種包を、水底に沈め、木蔭を作り、水  
の冷るやうな、心を用ふべし、  
一苗床ハ、成べく前廉に整へ置くべし、  
泥ふかき苗床ハ、二三日の間、日當  
て、随分龜拆きずれるほどに干し、水汲仕  
掛け、蒔付まきて後、一兩日、種の居合あひ待  
て、又水汲外はずし、乾濕かんあつの間にして、日に

暖め置けば、五日を経過して、生出る  
なり、若苗代わかあひの頃、雨天打續きて、蒔付  
け後、より事ありとも、苗床の泥居合  
ぬ内ハ、かからぬ、蒔付くべからぬ、  
但し、苗床を、早く整へんとし、ても、  
草少ふくして、整へ難き地も有べ  
し、斯の如き地ハ、葉の多き小竹を  
切入れ、踏込ふみこ置き、後、蒔付くべし、

竹の青葉を用ふれハ、苗立よるし  
きものふり、竹ハ苗を移し植たる  
後に、拔去るべし、木の葉次用ふる  
もよろし、若馬に踏せらる稲藁杯  
を、用ふる時ハ、猶更竹の青葉を取  
まぜ、整へ置くを、よしとするあり、  
一苗床の、水深けれハ、陽氣攻うけがた  
くして、芽ぞし遅し、芽ぞし遅けれハ、

おのづから泥覆ひ、又泥覆をぬ種も、  
芽ぞしんとする時、腐敗を生ぜるも  
有り、依る苗床の水ふかきハ、大ニあ  
し、ま萌出し後と雖、水深きハ、忌む  
り、

一苗床ハ、ひろく整へ、うすく蒔付けた  
る方、苗立よるし、種ハ壹坪ニ付、精種  
かれハ、八合、不精種かれハ、九合、或ハ

壹升を、目途とし、蒔付くべし、  
 但し從來種を浸すの日數少なき  
 が故、種の善惡を論ぜざして、萌生ほつせい  
 す、予が方法の如く、百日有餘も、浸まゐ  
 し置く時ハ、惡種ハ、おのづから腐  
 敗するに依り、蒔付けても、苗立少  
 なし、精種なれば、決して其患なし、  
 一仕掛水ハ、苗床の横を廻まり、せり上あり

して、掛くべし、水口より、流しかくれ  
 ば、泥出て、種埋り、大よあし、  
 右の方法を用ゐる時ハ、従前の出來  
 高に應し、年々出來増、平均壹割半  
 より、少なかからば、多きは、一倍ばいより  
 越ゆべし、地味善くして、多く實り  
 來りし地ハ、割にして、ハ、出來増少  
 かり、地味悪くして、少かく實り來

りし地、又ハ旱寒等よ、凶作此歳  
 ハ、割よしてハ、出来増多し、是まで、  
 各村植付けの内、從來平均米貳石  
 三斗内外出来たりし地よ、貳石六  
 斗四升五合出来たりも有り、又ハ  
 三石五斗壹升出来たりも有り、從  
 來米壹石三斗四升内外出来たり  
 りし地に、壹石六斗出来たりも有

り、又ハ三石五斗出来たりもあり、  
 歳よより、不同ありて、確定せし、猶  
 細かに、其利益有る事をいへ、第  
 一、米の性能く、第二、早冷に耐え、第  
 三、虫付の患少く、第四、収の量目  
 多く、第五、飯よ炊きて殖え、第六、酒  
 よ醸して利ある等あり、  
 一植試の節ハ、同種を以て、半ハ從前



通り、半ハ此方法の通り、苗を仕立、同  
 田に植分て、試むべし、  
 一 培料、并に人力を用ふる事ハ、従前の  
ばいれど  
こやろ  
 通にてよるし、

勸農新書卷二

福岡縣 林遠里 著

稻種生育法下

○種を寒中より土中よ圍ひ置く

事 種を取の方法、其他上巻よ  
 記載する事ハ、爰よ省く、

一種を寒中より、土中よ圍ひ置くよハ、  
 寒國ハ、雪降初ると、目途とし、暖國ハ、  
 小寒中と、目途とし、寒暖適度の國ハ、

冬至を、目途とし、種叔壹斗ニ付、細砂壹貳舁を交合せ、一包とふし、一たひ種を濡して、埋め置き、季節又至り、堀出して、蒔付くべし、土中の深さハ、凡壹尺貳三寸堀り、底より七八寸まで、次種と見て、其上四五寸、埋土とあし置くべし、

但し、敷石の種、圍ひ置くにハ、横

長く掘りて、圍ひ置くべし、深く埋め置きハ、寒氣の間ハ、土中又温りありて、空中の氣候と、相違するが故、よるしからん、又温りうすき場所、深く埋め置きハ、芽の生し遅くして、あし、

一種、砂を交ぜ、且、濡して、濕氣少なき地に埋め置きハ、蒔付けの頃、ま

でも、濕氣通らざる所ありて、大よあ  
し、又砂を交ぜざる種とて、ぬら  
さざして、埋め置けハ、雨の降るまで  
ハ、埋め置かざるも等しく、埋め置ふ  
の季節、後るゝ故、かからぬらして、  
埋め置くべし、

但し種に砂を交ぜ、圍ひ置くハ、雨  
雪化しぬり、通ひ易きのみにあら

後、素より、  
て、芽を生むるも、  
が爲かり、されども、濕氣多き地、  
埋め置くにハ、砂を交ぜざるも、障  
かし、

一日當よくして、濕氣少なき地、埋め  
置けハ、芽の生し早し、予が居住の村  
にてハ、八十八夜より、二十一、二日、或

ハ二十四五日前より、芽ぞをかり、  
一日當よくして、濕氣多き地、又ハ日當  
あしくして、濕氣少き地より、埋め置  
けバ、八十八夜より、十三四日、或ハ十  
六七日前より、芽ぞをかり、  
一日當あしくして、濕氣多き地より、埋め  
置きハ、芽の生し遅し、八十八夜より、  
五六日、或ハ八九日前より、芽ぞをかり

但し斯の如く、日當の差、濕氣の  
多少、且場所の寒暖、埋土の深淺より、  
芽を生じざるは、遅速あれハ、能  
く注意して、埋め置き、時付けより  
十日許り前より至りて、先種包を掘  
出し見るべし、若芽ぞし過んとす  
る時ハ、日陰の濕氣多き所より、埋替  
へ、芽ぞし遅しと、おもふ時ハ、日當

よく、濕氣少かき所は、埋替へ、芽を  
 し此不同有時ハ、上と下を返し置  
 きて、十分よろしと思ふ時、蒔付く  
 べし、

一種を蒔くにハ、芽の生したるを、蒔く  
 べきよあらねども、土圍ひ、并に水浸  
 し、共に、芽の生ぜざる種を、蒔き置け  
 ば晴雨に依り、水の掛引等、手数多く、

自づから疎かまかり、替くして、苗を  
 仕立ると、間と誤りあり、故に土圍ひ  
 ハ、土中にて、芽の生るを待ち、水浸  
 しハ、上卷にいふ通り、氣節に至らん  
 とする前に、種包に水より、引揚げ、日  
 陰に置き、芽の生るを待べし、芽  
 ざし過るハ、大よあし、十粒の内、  
 七八粒も、芽ざしする時に、蒔付るは、

最上とするなり、

但し種を、土中より、掘出して、直に  
蒔くハ、あし、芽ざしたる種とて  
も、一兩日日陰より出、空中の氣ま  
ふれしめて後、蒔くべし、水に浸し  
置し種も、おなじ、

一苗床の作り方、粗漏そろうにして、地並片落  
かゝる所に、蒔付け置けハ、水淺き所ハ、

苗立よく、水深き所ハ、苗立あし、又  
足形杯の内は、蒔付けし種は、萌出あ  
しきハ、人皆しる所なる、晴雨の差  
別もあく、水を深くせき入るハ、愚  
農のする所なり、

一植付けハ、苗の方には長なる内に植  
をよしとす、長し過くれハ、植付け後  
れたりと知るべし、苗は、自づから苗

の寸あるものなり、當國よてハ、蒔付け  
 蒔付け共々、十五六日、或ハ二十日  
 許りも、後れたる村多し、是ハ麥菜種  
 の収獲あきの遅きよもよるべけれど、  
 蒔付けとりあひの節よ後るよハ、損失あひ第一  
 されハ、川上川下の村々、協議けいぎして、先ま  
 堰どせき水の仕掛けを早め、蒔付け植  
 付け共々、節よ後れざるやうよ、能く

注意すべきなり、  
 一國郡に依り、氣候等トからざれば、蒔  
 付け蒔付け共々、案よる遅速あるべ  
 し、然れとも、猶其地よて、蒔付くべき  
 季節を知らんと思え、種を寒中よ  
 り、畑に蒔付け、或ハ水田に蒔付け置  
 て、翌春おのづから生出るを見て、  
 るべし、又水に浸し、土中に圃ほひ置べ

き季節を知らんと思え、刈入れし  
後、追々畑或ハ水田に、蒔付け置き、  
試むべし、秋の日、未だ暖むなる比よ  
り、蒔付け置き、十四五日を経過し  
て、生出る事あり、濕氣多き地に、深く  
埋め置くか、又ハ水中に沈め置き、  
芽ぞ、いへと、いへども、種を土上に置  
き、數日乾濕かんあつして、芽ぞ、いへ比までハ、水

浸し土圍ひとも、早きと知るべし、寒  
の氣候定れハ、種を土上に置き、日  
數を経るとも、芽ぞ、いへものにあらば、  
故に雪降るむる比より、冬至小寒の  
間を以て、種を水に浸し、又ハ土中に  
圍ひ置くべき季節とハするあり、  
一寒中より、畑に蒔付け置き、いへ苗を取  
て、田に植るに、稔り是に増るハ、いへ



然れども、雜草生ひ交りて、煩わづらえしく、  
 生ひ出ぬ内に、鳥の求食患等ありて、  
 手數多く、行ハれ難し、  
 一寒中より、土中ニ圍ひ置きし種を、春  
 に至りて、畑に蒔付け、苗を仕立、田に  
 植るに、稔り最もよるし、苗あらく見  
 ゆれども、植付けし後、長びること、妙  
 かり、

一畑稻を作るにも、種を寒中より、土中  
 に埋め置き、氣節に至り、堀出して、蒔  
 付くべし、

一寒中より、水に浸し置きし種ハ、春  
 暖に至りて、浸せしよりハ、多く芽ぞ  
 し遅し、土中ニ圍ひ置きし種ハ、春  
 暖ニ至りて、浸せしよりハ、芽ぞ早  
 しと知るべし、

一植試の節ハ、上卷にいふ通り、同種を以て、同田に植分けて、試むべし、出来増し、并に利益の多き事ハ、冬浸りの稲に、異からざ、

右の如く、種を寒中より、土中に圍ひ置くべきハ、稲のみにあらず諸草木、此理に同じ、栗或ハ椎杯の如く、自ら落る種ハ、落ちて後、十四五

日を待たざして、蒔付け、柿或ハ枇杷杯の如く、落難き種ハ、十分熟せし時取て、皮肉のまゝに、蒔付くべし、左すれば、肉ハ肥しとかりて、生立宜し、譬へハ、赤子の母の乳を吸て、生育するが如し、天地の萬物を生成する、自然に出だといふことおければ、兎角、種に無理を與へざ、

彼れが自ら、長し易きやうに、人力  
を用ふべきあり、

以上、種取より、苗取仕立るま  
でを、農業の先務（まづ）とすれバ、先其  
肝要（きんよう）あること歟、撰て記す

明治十年十月廿七日版權免許

福岡縣士族

著述并  
出版人

林 遠 里

筑前國第九大區示  
區早良郡重留村住